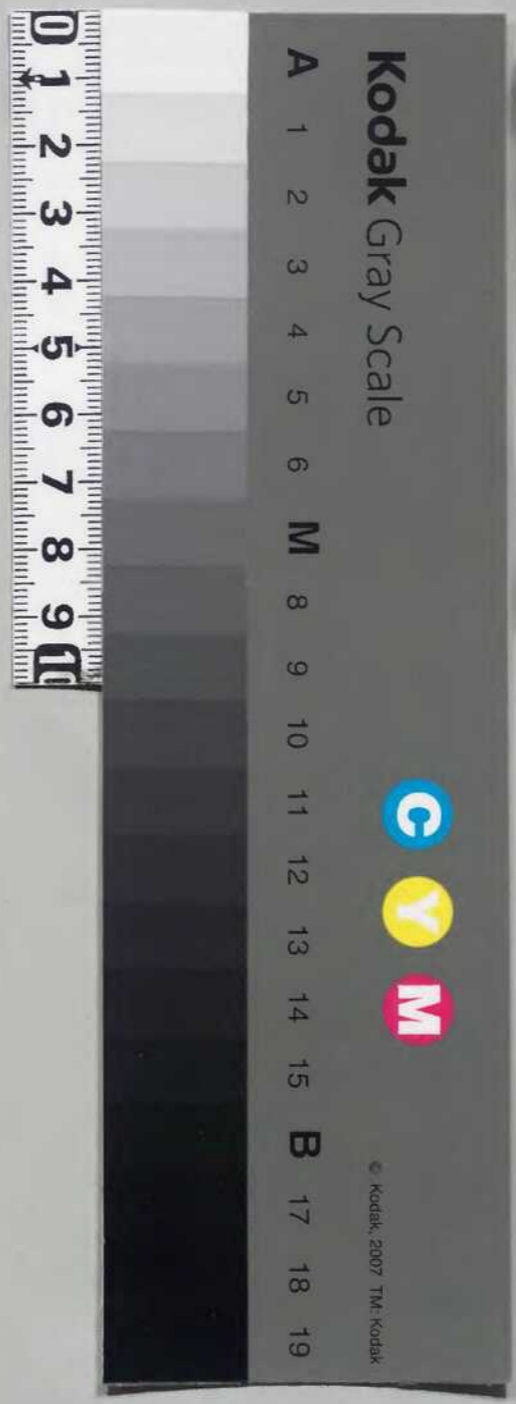


98

寛永諸家譜

藤原氏丁三冊之内二
兼通流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數		186 (98)	
函號	附	76	1





本多

寛永諸家系圖傳

藤原氏

丁二 小家

兼通流

本多

大織冠十代師輔二男

兼通

関白太政大臣 忠義公と謚寸

淺草文庫

頭光

閑院大将

頭忠

魚家

魚助

光助

助俊

俊通

助忠

助行

助清

清家

家満

二条兵衛

光秀

賀茂社藏 中務

助秀 すけひで

豊後國本多よりつとに於けりしより
つとに本多に稱號す

助定 すけさだ

右馬允 うまのり

建武三年右軍守氏助定に命じて
志村の凶徒をたづめ去りしに時清教也

海

志村以下凶徒未殺

志村以下凶徒未殺
伊井城に系事
大草伊豆守に随從
彼に被給糧糶や
忠賞に於て

建武三年三月二十日源頼朝判

本多右馬允

付時御定由候を志つめて御ありこの
ゆへに高氏感并一為引換祿
粟飯系乃五郷をへ備ふ
と下久よいへく

高氏
判

下

本多右馬允御定

了令早領知為法圓換祿
同粟飯系郷本事

右為勤御貴不宛行也
早守先例三と領掌
状如件

建武四年八月五日

御政

定心

正名

正經

類二部

豊後守

秀清

豊後守

法名心賢

法名長親

至

瑞

君臣の礼を以て

清重

修理大夫

法名淨蓮

信重

義三郎

享保二年 清康君之別 津油繩子

一をひく 牧野 傳次 傳義 合我

のと 紀 討死 二十之歳 法名道哲

廣孝

孝之節 孝後守 越前守

三列古井乃城 居寸

廣忠卿 廣乃字を給ふ三列の

諸士卿 廣忠卿よき子あるひは

織田源正忠信あり 属一ありひ

と川義元よき子ありと廣孝

ありと廣孝 廣忠卿よ属寸

冬列和回信、本と野守牧度れ我小

廣孝つよ、廣忠卿乃麾下

ありと志む、軍四あり

永禄四年今川氏去、去良義昭

命して冬列去良東條、居

と、と、廣孝小牧乃卿

より、を、義昭とあひ、

事、牧度より廣孝と、み、

と、と、と、敵城を、

義昭の家老富永伴五郎といふもの
勇名ありしををらおくだるかふ
廣孝徳をよめく富永をつさせ
うけ首とゆら伴五郎の家令
をいへく藤浪徳子ありこれ
しるく義昭の兵大り利をう
まひつ井りし和をふい城を御
し

東照大権現との切と貴し東條氏の

うら貞福弱湯永良本田高楠文授間
寺為湯津平山田等の地と廣孝
いほりしと且海の御書をおし海

こと詞よい

今度於小牧おむるは御親忌
為勤田留永伴五郎治職
回心成り泣きにめ書立永く
領事早

一皮地附人後より極一切

許容寺社願よ至(一)を万々

為計事

一 寺事儀り此に代り此にお高
禊了色懸別は比中へ入

者(一)也改改青(一)を不務(一)

一 伴(一)又(一)而(一)回(一)心(一)流(一)中(一)に於(一)津(一)平(一)

行(一)分(一)所(一)善(一)く(一)旨(一)岐(一)比(一)余(一)人(一)に

お(一)善(一)く(一)旨(一)岐(一)比(一)余(一)人(一)に

お(一)善(一)く(一)旨(一)岐(一)比(一)余(一)人(一)に

右(一)作(一)儀(一)主(一)志(一)節(一)は(一)比(一)色(一)至(一)
よ(一)名(一)永(一)不(一)可(一)も(一)お(一)遠(一)志(一)也(一)
の(一)如(一)件(一)

永祿四

六月廿日源元康御判

本(一)多(一)君(一)後(一)也(一)也(一)

一 寺(一)後(一)我(一)切(一)あ(一)る(一)ふ(一)ら(一)り(一)

末(一)の(一)我(一)場(一)つ(一)ま(一)り(一)

大指現抄書をくまふに調よいしく
と後合我津手あ津言名を
地類に辨山く自一も早く
と作つる由在事厨中は税急
け事は様守る可く入
こつて流く

十月一日

墨苑
元康御判

本費

系

同五年冬列一向宗一揆蜂起りとき
廣孝去舟の城ありしを
去長根針津若松大草浦新八面
依本野寺橋井等の徳色これ
歎とたし廣孝これあひひよる
約言あひたかふけり此冬列の徳
岐宗旨ありあすといふは満
おろく歎し属すこれゆへに廣孝
嫡子若二郎を人質とす

墨澤城一丁三

大指現津威あり〜〜〜端子〜〜〜元服

とせ〜〜〜浦ひ津澤の字と給りて

喜二郎康重と号寸翌年乃

是一揆たつぎぬ

大指現東冬河〜〜〜津進良の〜〜〜

廣孝先平ともりて小坂井〜〜〜

つりて親〜〜〜擊首也十余をゆ〜〜〜

け〜〜〜現廣孝つ〜〜〜のた〜〜〜ひ〜〜〜

この二十人

大指現津威怖〜〜〜浦ひ津進良の〜〜〜

お〜〜〜をう〜〜〜ひ〜〜〜は〜〜〜地〜〜〜る〜〜〜を〜〜〜

と〜〜〜〜浦ひ津進良の

津進良を〜〜〜浦ひ津進良の〜〜〜

津進良の〜〜〜浦ひ津進良の〜〜〜

〜〜〜津進良の〜〜〜浦ひ津進良の〜〜〜

〜〜〜津進良の〜〜〜浦ひ津進良の〜〜〜

〜〜〜津進良の〜〜〜浦ひ津進良の〜〜〜

川舟万象康御判

豊后守 藤原 兼人

多〜〜方〜〜い〜〜

神が〜〜

同六年

大指現物又二通を〜〜

一〜〜城〜〜成〜〜度〜〜津志〜〜

然る一國意破控〜〜其城

ふ丁立別 象事

一於東京以年通作知川留水

付之近職 且及中如先判其人

近職何〜〜古昔以夫象〜〜

多味多洋館地〜〜内〜〜お高

程以地〜〜地〜〜多〜〜以付中地内

永代賣借米錢と度款も成者

信成爲河成と名忠節又志

主事 長被友人 至(一) 一切
納不た(一) 了(一) 取(一) 事

一 其城(一) 籠(一) 取(一) 向(一) 度(一) 丁(一) 五(一) 足(一) 見
右(一) 条(一) 々(一) 未(一) 代(一) 之(一) 有(一) 取(一) 邊(一) 去(一) 也
川(一) 如(一) 伴

永祿六年 亥

十二月七日

義人 家康御判

本多忠房書

留永傳(一) 所(一) 知(一) 所(一) 貝(一) 福(一) 約(一) 場(一) 并
永(一) 良(一) 山(一) 向(一) 路(一) 々(一) 爲(一) 留(一) 地(一) 各(一) 至(一) 地
々(一) 事

一百貫文

下(一) 留(一) 一(一) 村(一) 取(一) 回

一 九(一) 拾(一) 六(一) 貫(一) 百(一) 文(一) 善(一) 由(一) 々(一) 々

一 百(一) 五(一) 十(一) 七(一) 貫(一) 九(一) 十(一) 六(一) 文(一) 濃(一) 戸(一) 々(一) 々

右(一) 々(一) 之(一) 下(一) 不(一) 須(一) 無(一) 事(一) 隆(一) 成(一) 川(一) 以

留(一) 地(一) 々(一) 々(一) 爲(一) 留(一) 地(一) 各(一) 至(一) 地(一) 又(一) 津(一) 平

爲(一) 留(一) 地(一) 本(一) 田(一) 々(一) 一(一) 各(一) 付(一) 去(一) 回(一) 々(一) 郷

其の知りし外七十三貫文の地
を運上りて切津忠節に奉
お束代不_レ_レお遠_レ也_レの如_レ評

永禄六年_亥

十二月日 家康御判

本多忠房より

同七年と川氏共の宗肥後守

命して三列田原の城に據し
廣孝楊邑よりしてゆく備へおそ
る教度よりしてゆく廣孝の
本多忠房に命して其の宗肥後守
を継承せしめし外郭を攻め
城中より寸おとす城を破
りし

大指現されし威_レたす_レ田原_レ城
たす_レ二_レ濟_レ白屋_レ浦_レ郷_レ敷_レ比

新野養乃地をたまたまの書

い

と度田原概く取付為
忠貴を玉置之事

一二百貫文 田原

一百五十貫文 概

一五十貫文 二崎

一五十貫文 白屋

一 百貫文 浦

一七十貫文 交地

一 百貫文 新野

一 田原之概

交代之事

瘡王山色

一 色玉

其方

古桑

ふふ

縦改^まる^る為^に何^れ故^に改^める^る地^方名^を末^代代^りと^す為^す
本^比田^原地^を比^比檢^察改^める^ると^すに^およ^ぶ
正^比比^名可^免除^者也^に如^件

永^禄七^年甲^子

院^人

六^月日

家^康御^判

本^多忠^房後^守等^に

廣^孝等^はよ^しと^ひく^く田^原乃^城より^り
所^{より}これ^に進^出を^せめ^と家^にけ^し也^と

赤^沢夫^久間^高松^赤根^根村^部七^村等^は
七^千余^貫乃^地を^之領^す

大^指現^在を^別を^およ^ぶに^領す^にい^へん^も
な^を久^野乃^城に^領す^に孫^叛人^{あり}は
時^廣孝^は領^すに^{あり}く^{これ}を^謀す^に

同^十二^年今^川氏^共懸^川乃^城に^領す^に
た^くこ^のり^に時^廣孝^天王^山に^進出^す
これ^をせ^じ家^人本^多忠^房乃^御敵^と謀^す
あ^まり^のり^首八^級と^すに^{あり}

元龜元年六月江列姉川合戦の時
廣孝先平ともありて惣念が陣より
やがふまゝよきひく敵陣をとらむ
廣孝をほくといふも鑑の系摺
あつらひて層々やうす

同年信長と胡合淺井と江列滋賀
一をひく對陣なりとも廣孝

大指現乃治をかゝつる石川日向守家成
とあひまゝにか摺となり進む

信長これを守らばいふ下友吉郎
秀吉と列御僕一は
あまを謝せし

同三年十二月三方原合戦の時
利より一もふいよひく廣孝兵
を二一とつとめさかひ殿軍
たもく廣孝が部人高部屋架御首
級をえり

天正元年奥平義邦守

大権現一とてびとくつ系と記

大権現乃沙始君を乃子奥平九八郎

行身化守小嫁一給ふとよひと廣孝

沙使とりて乃事とつと心止海

九八郎が妹と廣孝二男友乃守純

妻と記

同三年五月と藤合戦乃とと酒井

左邊乃志次乃の後乃と記ひと

嶋栗山よおとしく廣孝も海別よ

兵をお具一とおりくと

大権現を列小山をせめと記

廣孝とてびと海つ系

大権現を列を平均一とたま乃ら

廣孝一と命とく久野乃城と守

らめ給ひ河尻橋原橋本飯田小川

村原川乃二千費乃地を給ふ冬列の

旧領ハ嫡子康守一とつりわんとよ

寸とれも軍務あらとと毎度法

手をつとむ

同十年甲列し奉陣乃て廣孝

たふびりし詔お小田原乃大城

せめらるゝととも軍と命て

かへる

同十一年從也位下又叙一者

一何とていふと

大権現乃仰

書後書と

越前守と稱す

同十二年壬午合戦

大権現蟹江乃城をせめ

廣孝一命て小幡乃岩を捕

とめ給ふ

同十五年豊后秀吉筑紫征伐の時

廣孝

大権現乃侍使となりて

秀吉一掃をんて岩石城をせし

これ廣孝我四あり秀吉是とがめく
令鐔乃大膳をたまたふすく
秀吉の返書なうけし海りり魚津時
も海、黄令十枚羊乃皮乃指織一匹と
中書

同十八年小田原陣のとき廣孝諸將
とふるく倍せし

大指現園東八列と領したまふは
廣孝と列白井し居し

慶長元年十二月七十歳ありて
卒し法名道楚

康重

彦次郎 豊後守 冬列白井の

城下生れ

母ハ松平左太郎義春のしりめ

永禄五年乃冬九歳よりて元禄

大指現御鐔の字をたまはり此御

馬を相領寸

同十二年今川氏去る川乃城

君と相とく康重十六歳よりして

父よりとくびくく我場

をまじく首級とえり

之龜久年姉川合戦より父が

陣よりありて敵の首をとり疵二

ヶ取をがらふ

同三年湯方原合戦の時味も

軍兵川よりせくまにをひく康重

馬を二く首級をえり

天正三年長原合戦の時父より

おろく萬葉をまじくやく

すみく敵乃首とゆりこる

康守疵よりつる二ヶにちり

あつと鉄炮ありあつとた股

やつとつれ玉つ井よゆけすて股

あり

同年を列小山飯沼原より神木の
 合戦の時より康守み子供は母と侍じ
 飯沼原よりとむく欲兵ころるのさるの
 鉄炮康守の願はあつるをれもつて
 ころるつてつて
 同五年康孝冬列より康守と康守よ
 ゆづりかつてゆづりころるのさるの
 場よりお色じくころるの康守父より
 兵と率く供せり

天正六年

翌年甲列の無意列より出陣とけ
 ころるの康守大久保七郎大志世と回く
 大権現乃作よりあつるをり久津原
 ころるの陣をころる
 同十年甲列し事陣よりころる康守
 諸おとたふゆ
 大権現甲府よりころるあつる
 ころるをころるころるの康守
 諸おとつてころるをひつてころる

を備えり

同十二年壬午合戦乃より康守諸
將と共に先手とりて之好孫七郎
秀次堀久左郎秀政等とおとかし
らうらうらとありてひくくうら
うらうらとありて目釘からぬらおふ
あつよとひく歌とお継う首と捕
こ乃日康守剣とかりあつる七ヶ取
後討死しりやの二十六人あり懸

合戦乃より康守諸將をかりあつる
い處とも信忠をつとめく城をせむ
同十三年石川伯耆守と方一本奇
のころ三列乃諸城自み五人質と
きしつるあつるをひく康守
ゆゑ二男紀貞を質とてしり
とらうらう

大権現乃のうゆく郷が家累世志
ありあつるふりたりらん質

もとめんやとてすまらら紀貞と祀又
廣孝が似比り居せしめし
同十八年小原陣のこゝに康平天皇
にりすんで城をせし
大権現園東浦入玉乃と記と列白井と
しつまつり二万石を似せし

同十九年奥列陣乃と記 沖糸
穴をふりりく進給り 押扱よ
いさりてかゝる 沖糸穴乃と記に

い

急度^{まゝ}の奥列^{あうり}浦^{うら}なる
ゆゑ糸^{いと}を^を用^{もち}さ^しる^る者^{もの}油^{あぶら}
ひ作^ひや

十二月 冒 沖糸穴

お多^お貴^たひ^ひと^とあ^あく

文禄元年^{ぶんろくねん}の^の解^げ陣^{じん}乃^のと^と記^き

大権現いざな明あきあはれあはれ必かならず名な護まも屋や一いちととままじじ一いち

康重あきひら八やち圓ま東あづま乃なり守まもりりととままじじ

同四年どうしやうねん後ご五ご位ゐ下げ一いちととままじじ

受うけ五ご年ねん石田いしだ之の成なり孫まご叛ひんのの時とき康重あきひら

名な徳院とくゐん殿でん一いちととままじじ一いちととままじじ

吉田よしかた守まもりり居ゐ城じやう位ゐ列れつ上うへ向むかひををせせ量りやう

十じゆ七しち一いち

名な徳院とくゐん殿でん軍ぐん兵へいをを率りやう一いちととままじじ

後ご向むかひ一いちととままじじ一いちととままじじ康重あきひら殿でんととままじじ

同六年どうしやうねん乃なり志し

大権現おほいざな白しろ井ゐ一いちととままじじ一いちととままじじ

畠はたけ一いちととままじじ一いちととままじじ乃なり

地ちととままじじ一いちととままじじ一いちととままじじ乃なり

一いちととままじじ一いちととままじじ一いちととままじじ

大権現おほいざな畠はたけのの城じやう一いちととままじじ一いちととままじじ

康重あきひら乃なり志し一いちととままじじ一いちととままじじ

一いちととままじじ一いちととままじじ一いちととままじじ

家いへ累かさね世よ忠ちゆう切きりととままじじ一いちととままじじ

城とありしころりとなりしは

同八年

大権現將軍宣下津冬内れは

珍る少くはなるとふまの十人

康守うれた乃方弟四列あり

同十六年三月康守是濟よとひく

病しり

右権現殿津内書をたまり病とせ

らぬ松平助十郎と使わして

是時一いし同月廿二日一康守
卒寸歳五十八 法名道名

重純

藤六郎

重章

友六郎

康紀

彦次郎 伴務 忠 忠 忠

冬別回原乃城よりあり

母石川日向守家成が娘

天正十九年

大権現神禱乃字とたまつり一文字

の清勝乃物と洋飲と

慶長六年位五位下より叙す

同十年

右通院殿將軍宣下清系内乃と記

諸大夫跨りて修身を勸康紀

之友乃方等回乃列あり

同十六年康紀又遺記と記く

同十九年乃冬大坂神陣乃時康紀

共としめく備前乃攻と記

うねら 信と記く

おまをせめと魔下乃記

陣法

翌年五月七日大坂合戦の時康紀
軍と松平筑前守が陣乃たてし張
敵の首を斬奉二百十級白康紀
馬とてめく大子勇檣下し
いさくあひさめはと敵鉄炮
をいさくく康紀が首ありあり
破陣といふも幸しとて記と
まわす

元和九年

將軍家御軍宣下ありし諸大支騎

ふりしとて扈從しるもの十四人康紀

よりあられ方等四り従あり

同年九月二十五日墨崎乃城

をひく率とて歳四十五 法名

道策

紀貞

以所八對馬守 備あち

享和十六年^よ延也^の位下^りし^り叙^す守

名^な和^わ四年^{ねん}上^{じやう}列^{りやう}白^{はく}井^{けい}よ^をを^ひひ^く二^に万^{まん}

乙^{おつ}此^こ位^いを^をし^る所^{ところ}

同^{どう}六年^{ねん}

名^な德^{とく}院^{いん}殿^{でん}乃^の位^いを^をし^る所^{ところ}大^{だい}清^{せい}寺^じ勅^{とく}

同^{どう}九年^{ねん}閏^{にじ}月^{げつ}二十^{にじゅう}六^{ろく}日^{にち}一^{いつ}率^{りつ}す^す歲^{さい}

甲^か十四^{じゅう}日^{にち}法^{ほふ}名^な宗^{そう}廓^{くわく}

皇^{こう}母^ぼ

丹^に後^ご守^{しゅ}

元^{げん}和^わ四年^{ねん}の^の春^{はる}

名^な德^{とく}院^{いん}殿^{でん}一^{いつ}位^いを^をし^る所^{ところ}

同^{どう}六年^{ねん}乃^の冬^{ふゆ}延^{えん}也^の位^い下^りし^り叙^す也^{なり}

同^{どう}八年^{ねん}乃^の冬^{ふゆ}冬^{ふゆ}列^{りやう}古^こ井^{けい}一^{いつ}所^{ところ}内^{うち}南^{みなみ}

前^{まへ}廿^{にじゅう}等^{とう}よ^をを^ひひ^く子^こを^をし^る地^ちを^を給^{たま}ふ

寛^{かん}永^{えい}十年^{ねん}常^{じやう}陸^{りく}國^{こく}作^{さく}倉^{そう}村^{むら}

を^をひ^ひく^く二^に百^{ひやく}石^{せき}乃^の位^いを^をし^る所^{ところ}

女^{にょ}子^し

源^{げん}訪^{ぼう}因^{いん}後^ご守^{しゅ}頼^{らい}水^{すい}書^{かき}

女子

飛鳥井大納言雅庸の室

女子

堀市正利重の妻

忠利

伊勢守 武烈 伊戸より生る

母は吉平全善の次女 忠利が娘

享和十八年七月

右徳政殿清律の事と云ふは忠利と

号と云ふは入道清乃清腰の事

清書を項載す

同十九年の冬大坂清律の事

伊戸より生る

元和元年の夏大坂五乱の時徳政

と云ふは伊戸の事と云ふは清乃清腰の事

同年六月没す位下り叙

同九年父の遺詔をす

寛永十一年閏八月癸卯の内
をひく地をくくを角ふ

栄都 あいのつら

検校 けんぎょう

紀利 のり

掃部 しんのかみ

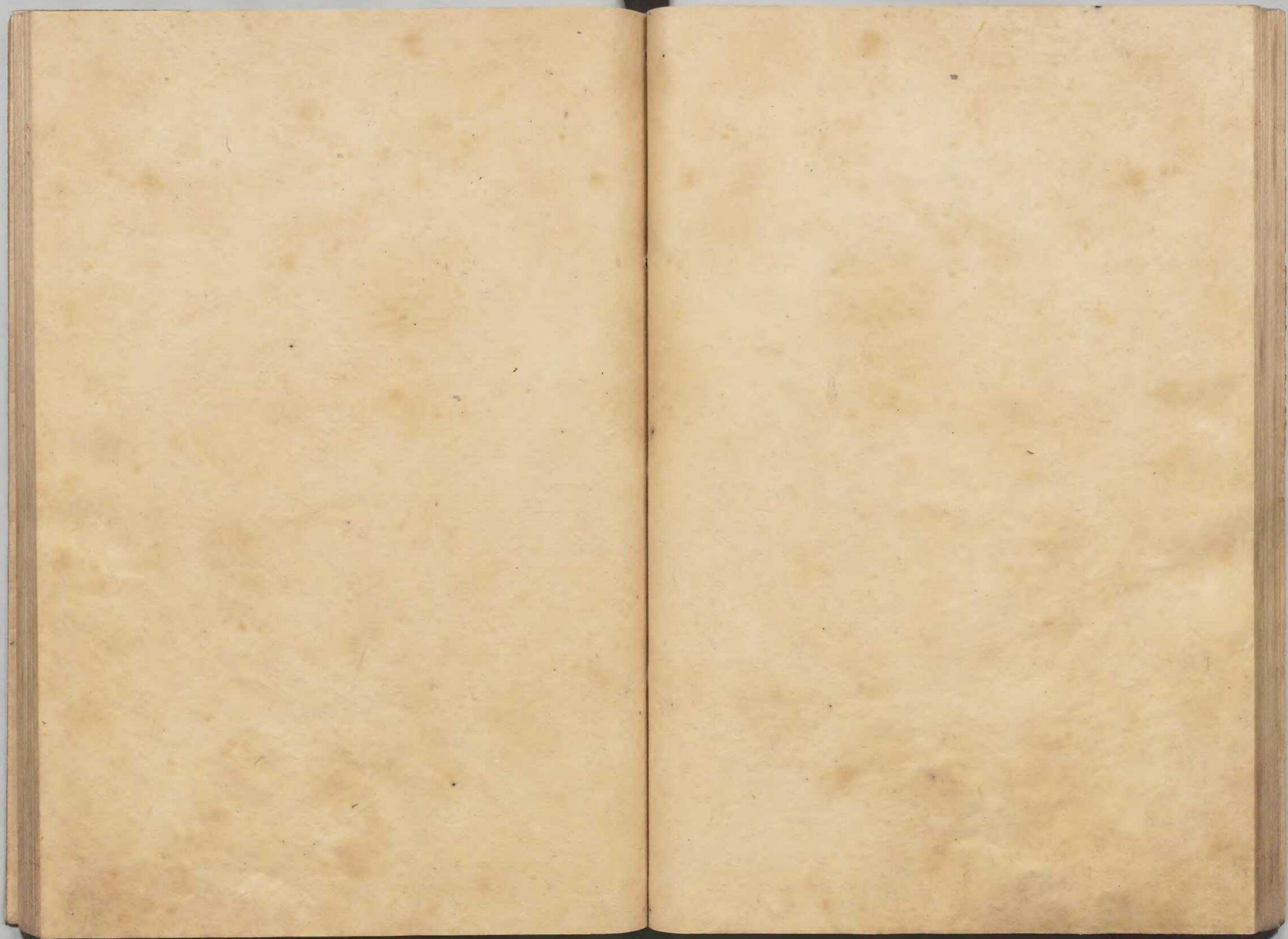
女子

幸山 ゆきやま 加賀守 かがのり 貞晴 さだはる 書 がき

家紋 いえのいざな

丸四 まるよ

左葵 ひだりあひ



道通十代

● 助秀

なま

助秀の程は侍将守より

かゝりしとれと略す

其後なまは置しうつさげな
なまをまうと称号す

助定

右子允

為氏將軍為列橫根粟飯系此
支下をう海系

助政

定政

定吉

正助

沐八郎

忠正

生國免河

清康君一清系戸川系

冬列為城下系一信列乃兵と我

死と歳八十二 法名學禪

正定

沐八郎

清康君より

冬列お祥を責ふと此後このあの事と

たらしめて討死

正行

沐七郎

清康君より討死

助俊

正定とありて此より戦死

十三郎

冬列お城よりをひく父忠正と

同と此我死に

俊正

佐渡守 中園冬行

清康君 廣忠卿より討死

六十九歳少く死す

正伝

作渡守 後五位下 甘國回あ

母、清康君の女なり 後正よ孫ふ

東照大権現

名護院殿より 天をくまらるる凡軍

のそらりこと 知くいふ寸といふ事

たし 志をも 君臣くかひいふ事

臭と水とに比すちのこも守佩練

をたくみして 浄親子あひひまぐ

と下さるるをあひひせしむ

正伝つねに 望みありま子正純

ハ平生

大権現乃右者よりさるれくゆつ

よもそ 諸大名統帥に戸よ参勤する

ら此ハ正伝養者よりりくく下乃

あふをこよつせしむれよしり

人みからうやゆりく正信

大権現後府より信

あつひの福場よおるせし正信

昼敷となくたむけし信

たぐゆつふとく

あつひの賓客よりあつひのゆり

わし流せよとせしゆり

名流院殿より

あつひのゆり

義久義弘の薩列よりあつひ

とあつひの正信よりあつひ

あつひのゆり

あつひのゆり

義弘の子あつひ

あつひのゆり

大権現より

あつひのゆり

あつひのゆり

高野山ふつふあねくたへくひん
つたけりこれより正徳のころより
もにふりくるり大坂陣の時
ある人みどりより家より一隊軍すと
いふものありはゆい諸人あひあつて
正徳大よむをりくく先勝
と記し後人の殿をらんするもの
すめや兵と下知より守味方軍兵
志の勢とげくややくこころゆり

つねふ義兵大に播磨をゆり
凡そ政をつとむる十七年なり
たゞ一関原陣のあをのぞ記くぞ
一と平生をいふつとむといふも
老年よこりくるをらんゆ寸
ころゆい五思ふく過
清霧屯地人

元和二年六月七日七十九歳あり
卒寸 法名善徳

正純

八郎 上野介 後五位下

生國同家

少卒 正純 一りつひ

大権現乃たち 一 作 一 自ら勤勞

寸正純 嫡男 一 親よ 一 ら 一 頻

沛露 忠 ありつひ 一 官 あり 時ハ

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

禅僧 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

大権現 大津 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

大敵乃 諸君の御事
あつるるもそれ任よふたる事と
いつたならしめれゆへに諸侯群士
等みな正紙をうやほすこと
り列公の諸侯諸君

大権現より賜へしと申す
すね者なむびり祈のぞり
とらあるめいごとくくみま
正紙へつげたりと
よびて達と

大のゆよそれ権柄いよくさ
り野列小山のびよに列乃
内へをひくと来比の万らふ
と申す

受也十九年大坂清陣の時諸君
をかこむといふも
る守りて軍兵の城を
とら

大権現を長考のふのせしむ

向をすて小和^{こわ}平とせしむるは
正^{ただ}紙^{かみ}ねく^くに^にね^ねら^らる^るも^もと^とる^るに
ら^らる^るく^く和^わ睦^{ぼく}の^の故^こ人^{ひと}と^とも^も之^{これ}理^{こと}
う^うづ^づと^と壁^{かべ}を^をお^おと^と寸^{すん}と^と記^きよ^よ大^{だい}坂^{さか}に^に使^{つか}者^{もの}
さ^さら^らる^るに^にあ^あら^らら^らむ^むと^とら^られ^れ理^{こと}
壁^{かべ}す^すて^て小^こ物^{もの}よ^よと^と記^きし^しら^らと^と不^ふ正^{ただ}紙^{かみ}
陣^{じん}場^ばに^にま^まの^の病^{やまひ}と^と称^{なづ}け^けあ^あま^ま
ま^まら^らる^るに^に使^{つか}者^{もの}と^とも^もく^くま^まら^ら
い^い庭^{にわ}も^も正^{ただ}紙^{かみ}つ^つ井^いに^に出^であ^あす^すま^まよ

ともく諸^{しよ}人^{にん}あ^あり^りあ^あつ^つら^ら壇^{だん}程^{ぢやう}と
ま^まり^りと^と理^{こと}と^と理^{こと}と^とあ^あら^らる^る
ま^まら^らる^るに^に本^{ほん}城^{じやう}の^のま^まり^りと^とあ^あら^らる^る正^{ただ}紙^{かみ}
都^{みやこ}よ^よの^のほ^ほら^ら聖^{せい}年^{ねん}清^{せい}陣^{ぢん}の^のと^と記^き
す^すこ^こや^や小^こ落^{らく}城^{じやう}し^しら^らる^るに^にあ^あら^らる^る
ま^まら^らる^るに^にあ^あら^らる^る
大^{だい}指^{さし}現^{げん}薨^{こう}清^{せい}の^の後^{のち}正^{ただ}紙^{かみ}後^{のち}府^ふに^にあ^あら^らる^る
ま^まら^らる^るに^にあ^あら^らる^る
名^な通^と改^か殿^{てん}に^にあ^あら^らる^るに^にあ^あら^らる^る後^{のち}

後府の賦實諸君を三人の君達よ
まらたなまひしと記述使とつうそ
うま合銀百枚十万枚を久能れ法
記ししふと記しし正純
治をがうりくの地よゆき正純
とらり

元和五年

名徳院殿下野小守於文入城とよ
佐野とらびりし記述使とつうそ

をひく十五万ふちるれ能れとよ
とらびりし記述使とつうそ
つうそとらびりし記述使とつうそ
同八年清初記とらびりし記述使とつうそ
相列由利し記述使とつうそ
を合記五万ふちるれ能れとよ
これと固辭し記述使とつうそ
ふてとらびりし記述使とつうそ

寛永十四年二月十日由利
を初く年寸歳七十三 法名常心

正勝

出羽守 法五位下 生國武藏

大坂毎度ハ清陣ノ地

名酒院殿

八月七日天王寺参

大敵ノ申下セ入

を初く敵殿乞寸
のふとらん
らまわ

元和八年十月又正純

由利ノ遷

寛永七年五月十日由利

を初く年寸歳之十二 法名

英玄

政重

安房守 没五位下 生國を以

大権現

台座院殿 福 寺 寺 寺 寺 寺

う ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

龍首守 光高 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

二ヶ玉 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

家老 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

政朝

帯刀 生玉加賀

寛永十九年四月一日二十三歳

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

將軍 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

忠純

大學 大隅守 没五位下 生玉加賀

大権現

台座院殿 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

享和十年四月

大権現下野しつかりのくさに板敷いたしきを敷く

一万石とくくししつかりに備ふる事

元和九年五月七日大坂御陣入

とき忠純ただただ天皇てんわうをお立てよとひく

あひこあひこの首くび二百十七を切らる

同年

大権現殿大坂此功を賞あづかりたまひ

下野しつかりのくさ玉寄川たまよしかわよりひて一万石

をくくし備ふる事しつかりすくく二万八千石

候あきと

寛永八年十二月十一日率しつかり以集

軍六法名しつかり普依ふい

忠次ただただ

大学だいがく 生國下野しつかり

十五歳しごさいのとき

大権現殿

將軍家より御臨幸あり

寛永三年八月二十七日壬辰

死寸 法名 宗哲

政遂

主税助 大隅守 後五世下 生國 加賀

實ハ其房守政守の子なり志純の婿

ありて家智を承け

寛永七年政遂十八歳のとき

在院殿

將軍家より御臨幸あり

同十二年七月二十九日卒

二十六 法名 哲秀

正重

三浦右衛門 生國 冬河

永禄十一年十二月十五日合川氏

より小室家へ移り比奈保申書あり

無川乃城よりありて

大権現入山遊りてありて

まをりこみせぬ正重すしんく
魁川のぬれ宿よいつらと先びけして
終をあくるせ甲士をうらと終
久龜元年六月二十一日江列婦川
合我のとも正重

大権現よりとるぶいさくほつり先も
おとりて終をゆごと大よ歌をつぶ
りて首級とゆつり

同三年九月二十一日を列一云の

合我よりクハカガ申務大捕也膳 俵

うあつほつり殿モウツよりとるく
甲列乃若おれをよひういふすう時
正重との恒をういふといひさか
ひさきりぐくばゆり歌をうい
ひ

四年十二月二十二日意列之方原合我
のち正重前よりとるあひ
しかひ歌をうら剣をかりあ

四ヶ所

彦列二侯の城をせめしむるに正重
甲斐軍兵新村某と云ふものより

らふ

正三年五月二十一日冬列 長藤

合戦のとき正重はひを捕りて

敵をやつりて首級をえりて後

正重冬列を方法とせりて

うれしむる事よとひく正重の勇名と

すくられしゆり

同六年七月十六日織田信忠掃磨し

殺向し神吉城をせしむるに正重

源の友をゆ監一益し属とく軍を

るりたけけとく城しり

同十二年九月十二日赤田利家の人

奥村伊豫守 能列 東条の城

居せしと能依の内務助成正兵と

切とされをかししと能利家并

うれ子利長末毒すまのうら誥つとるり
とせしふまねに正重利りおと属しして
軍ぐんとたなり依よ、兵へいをうらやから
同十五年四月一日を信秀吉諸軍しよぐんと
ひい初はつく九列くわ忌い之城じやうをせめ
と正重蒲生氏うらむに属しして
軍ぐんとるり諸人しよじんにうらやから城じやう
せめい
受と久年正重伏見よとひ

大権現を清きよくすくすゆつては正重
いしくはれくくえぢゆとすいつれ
とらよゆつるや正重平伏して
あまの謝あまのまがしつる
大権現の作しやうをうらたまりつる諸軍しよぐんと

下した免めん寸すん

同十九年十月大坂陣おさかじんの正重
武略ぶりやくあつるをうら

大権現後府（たごんげんごほ）の御入りのつひされ

白鹿院殿（はくろくえん）の御入りのつひされ

これをまうく正重（まさしげ）の眉目（まゆめ）と不家（ふけ）よ

をひく冬夏あまの戦場（いくさば）よ正重

先（ま）よりよりより諸率（しよそ）を下知（げち）し

進退（しんたい）まうものこたをゆるさ

元和二年七月
白鹿院殿総別（はくろくえんそうべつ）おる那（な）よとひて身代（みしろ）

をくらしくまうりしとるく一万余と

凡正重十六歳（おんしげむねいざさ）の七十一歳（しちじゅういちさい）よとて

うれあひで五十七年（ごじゅうしちねん）後（ご）に戦功勝（いくさこうしょう）

斗（たたか）をう寸（すん）

同二年七月之日死寸歳七十三（どうにねんしちがつのひにしにさいしちじゅうさん）法名

道名（みちな）

正氏（まさうぢ）

平四郎 生國（なまくに）

正氏十六年正氏十九歳（まさうぢいざさむねいざさむね）のとき

大権現ト一泊ト一トくト備トつトりト小田原ト
 奥列名護屋の諸陣ト一ト佐ト々ト
 つトとトしトとトれトらトゆトあトりトくトをト信ト秀ト次ト
 一ト一トはトくトんトとトりトひト羽田ト者トのト守ト也ト
 おト信ト寸ト者トれトどもトそのト子トいトまトさトとトつト
 ぶトねト一ト秀ト次ト自ト教トとトこトろトゆト一ト
 羽田トとト備トくト自ト教ト一トぬト正ト氏ト者ト也トがト
 分ト結トたるトよトよトるトくトおトるトくト死ト一ト
 去トるトふトとト死ト一ト一ト又ト保ト四年ト八月ト

女子

二十四日正氏二十六歳なり

長坂太郎トなト重ト村ト重ト吉ト妻ト

女子

成瀬隼人ト正ト成ト妻ト

女子

小右衛門ト子ト重ト吉ト親ト妻ト

正色

子介ト生ト小ト上ト尾ト

寛永十一年 正ま包十五歳のとき

右徳院殿り 浄福じやうふく 寺てら

同十二年六月二日十七歳ありて歿す

正ま費ひ

之や 沐ま 守しゆ 生國せいこく 上かみ 総そう

正ま重しゆ これをや 子こ 守しゆ 守しゆ 守しゆ 守しゆ

右みぎ 太たい 高たか 左ひだり 守しゆ 重しゆ 子こ 正ま 重しゆ 外がひ 孫まご

寛永十年 正ま 費ひ 十じゆ 三さん 歳さい のとき

右みぎ 徳とく 院いん 殿でん 浄じやう 福ふく 寺てら

大坂おおいさか 五ご 度ど の御ご 所しよ 正ま 重しゆ とい ちち ぎぎ

右みぎ 徳とく 院いん 殿でん 浄じやう 福ふく 寺てら

寛永九年

右みぎ 軍ぐん 家け 元もと 正ま 重しゆ 子こ 守しゆ 守しゆ 守しゆ 守しゆ

足あし 恒とこ 百ひゃく 人にん をわ けけ ちち ぎぎ

同どう 年ねん 十じゆ 二に 月げつ 十じゆ 五ご 日にち 從したが 五ご 位い 下げ 叙しよ 寸すん

同どう 十じゆ 二に 年ねん 十じゆ 一いつ 月げつ 終つひ ちち ぎぎ

浄じやう 福ふく 院いん 殿でん 浄じやう 福ふく 寺てら

同どう 十じゆ 九く 年ねん 同どう 九く 月げつ 五ご 日にち 終つひ ちち ぎぎ

大沛膏頭たいぼうこうとるふ

正史しんし

三沐 甘國かんこく武藏ぶさう

寛永四年七月十日十歳乃と記

台漣たいれん院殿

將軍しやうぐん乃一 洋湯やうたう一 たくらふ

正史しんし

正史しんし 甘國かんこく同前

寛永十一年二月五日十一歳乃と記

將軍しやうぐん乃と地ち たくらふ

家紋 九月くわがつ乃と立葵たちあひ



●
重次

正費まひりら実父じふ書坂しやうの先祖せんそ

書坂しやう繼友けいゆう 甘國かんこく冬河とうが

長坂氏、源姓小笠原乃かぐれなり
清康君 廣忠卿、つるまひ

重信

源十郎大良丸並尉 中園同前

大権現、つるまひ、つるまひ

此より、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

此より、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

此より、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

大権現、若川、進登、つるまひ、つるまひ、つるまひ

此より、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

此より、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

此より、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

此より、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

此より、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

此より、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

此より、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

大権現、つるまひ、つるまひ、つるまひ、つるまひ

津前よりをむく津弓なすひは虎皮
の鞆をへぬつね

冬別津浦總手たつひ時とて武田
勝頼が家人益田武者を射らる
その首をゆりりしれ余の敵軍守信
かゝあつし射らるるもの二人あり

同三年九月二十五日冬別一言坂合
戦のと記本多忠勝殿一
大敵を
をひせめしれ重信忠勝一
一属一諸

軍を下知しあつしひく味方事

ゆたなく引ちりだれて一人も死すね

よのあつし 武田信玄を別袋井

急し火をさるらひしちりぞく時

忠勝兵をとりあつしれを逃う川

重信まゝ敵七人を射ら寸も矢

みかとりりかゆしぬ

同年十二月二十二日冬別三方原合

戦のみまると重信敵兵二人を射

大らひ

丁酉三年五月二十一日長瀬合戦

守信浦々甲士六人を射ころし

大槍現勝頼と幸列小山よをひく合

戦より現志勝。家人松下幸兵衛等

よりしきんと守信較多れ矢と放て

敵五人を射ころすころゆりし松下

ゆめり新志とゆめり

大槍現を信秀吉と尾列早見をよ

をひて合戦のとき守信敵数人を

射ころす

同十八年小田原陣のとき守信足利

の城下よりをひく創をくあふ

事二ヶ所あり

奥列陣のみより守信白刃よまで

病死歳又十二

重吉

太師右衛門尉 生五回あ

十五歳入と記

大指現くひ相あ福ちか 一いくまつり

小回原こわげららびび 一い奥おく列れつ陣じん等ら小

佐守寸

享正十九年

大指現相列おほさしげんあはれつ东あづま那ならららら濃の屋や村むら成なり

重純

重吉しげよしとと海うみ一い浦うららら清しみず朱しゆ下げとと項かた
裁さい寸すん重しげ佐さ死しててののらら奥おく列れつ忠ちゆう勝しやう一いとと
ををひひくく 終はつととかからら志し勝しやう一いとと
属ぞくととららららゆゆめめありありくくままりりとと
后ご以い

八歳 六右衛門 生四歳に

文禄二年十六歳入と記

台渡院殿たいわだんとと清しみず一いたたくく海うみつつりり 吉きち田た

陣より信守の
をかうゆ
清純氣

寛永十年二十六歳
死す

家紋
松坡菱

たのぶの

● 果

在夕

武右衛門

生國 冬河

廣忠 八十二歳

法名 回心

貞逆

寛文九年 生國同家

東照大権現より清之をよめしめし

武田信玄二侯より出法一合我

より貞逆より清のり

ひさしおふる清おらる

武田信玄の清をよめし

享保十八年武田信玄の城を攻

と記平忠貞の継一属一

先登して面一徳底とかし

少

七十二歳より病死

某

八歳 生國同家

大権現より清をよめしめし

享保三年信玄より出陣

鳳来寺山家より三ヶ方原よりとひて
合我のより八歳十九歳よりとひて
高名よりゆかり
同十二年長久手陣の時足高より
とひく重彦をうらとふまは
解江の味よりとひく我死す

某

主水 生國同家

大権現より一法よりとひく海つり高天神
御合我のより主水十八歳よりとひて
是部丹波をうらとふ
三十八歳よりとひく病死

貞元

甲子年 生國同家

大徳院殿より一法よりとひく海つり
寛永九年五十七歳よりとひて死す

法名 乃智（のち）

吉久（よひく）

八丈 生國 同前

名 德院殿（とくゐん） 一 了（りょう） 了（りょう） 了（りょう）

寛永九年二月十日（かんえい 9年 2月 10日） 死（し） 法名

立推（たし）

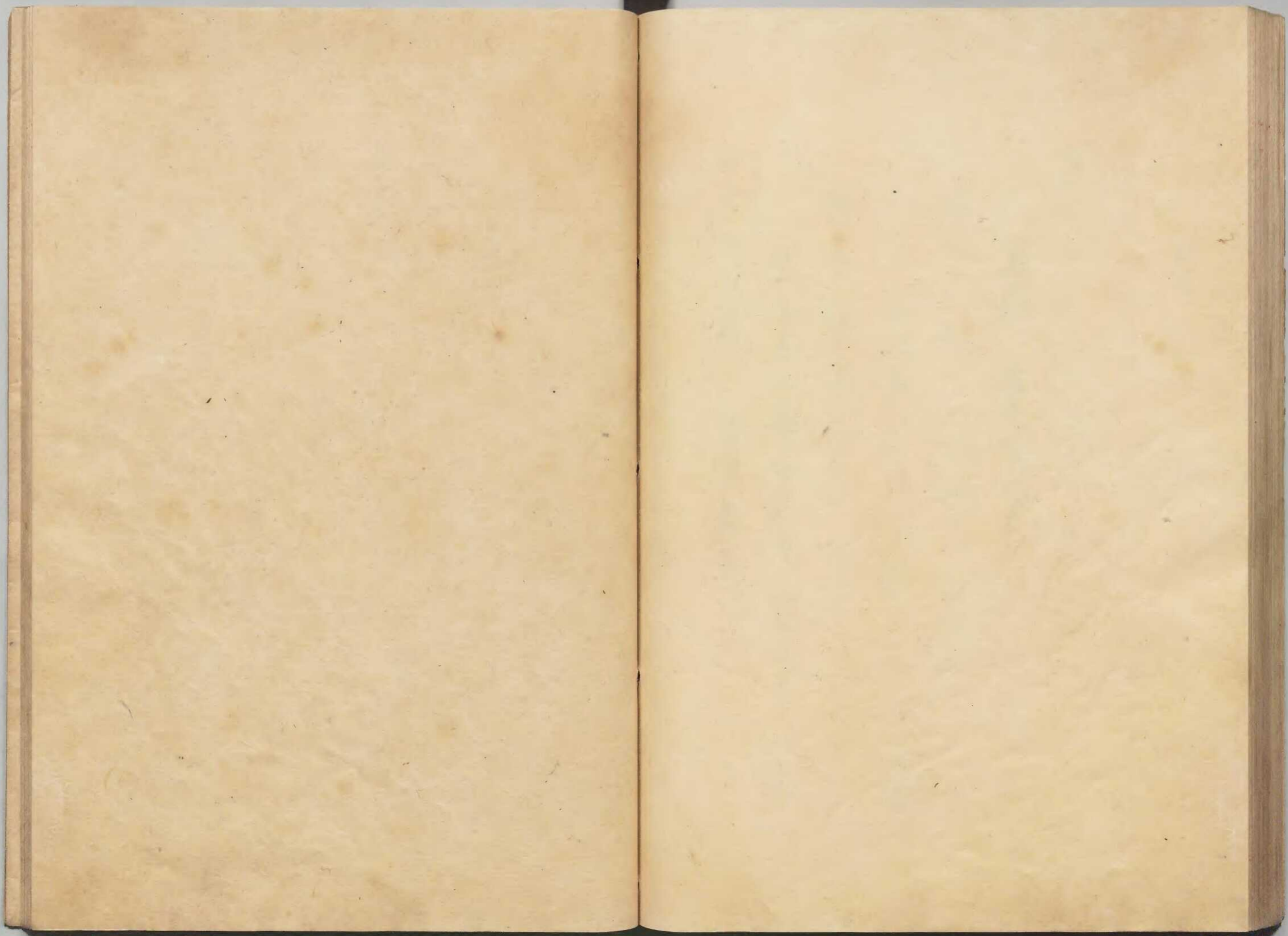
貞次（よしか）

甲子（かろ） 生國（なまくに） 武藏（むさし）

寛永十一年四月廿二日（かんえい 11年 4月 22日） 始（はじめ）

將軍（しやうぐん） 政（まさ） 行（ゆき） 人（ひと） 三（さん） 三（さん） 三（さん）

家政（けさう） 立（た） 了（りょう）



本多

● 光次

加賀守

生國巻河

墨海

東照大権現

寛文二年六月朔小田原より

死と歳九十三

光平らうへい

元亨大艾 生國回前

遠別とほ濱まは松まつ 一を五くつて

大権現おほごんげん 一福ふく 一を五くつて

右酒院殿みぎしゆいん 一清きよふ浦うらつふ

元和八年九月十日六十七歳しちじふしちさい

志しくく死し寸すん 法名ほうな日にち頼たの

光晴らうせい

小平こひら次つぎ 生國いこく武藏むさし

安永十四年

右酒院殿みぎしゆいん 一福ふく 一を五くつて

大坂おほさか西にし陣じん 一信のぶ守まもり

元和げんわ六年ろくにん 後府ごふの清きよ妻めかけ八十はちじふ騎きの負おん

小こりりりり

寛永十年

右軍みぎぐん家け食じき禄ろく 一いち浦うら 一いち

同十一年大津藩と清とす
同十二年食邑をくすまふ

光重

右大史 生國同家

享文二年

右徳院殿より福たたく備つる

実原陣なるびり大坂あ度の陣

小徳寺とつとむ

同十二年駿府より沖藩八十騎の負よ

そのり親

寛永五年十二月歳少にて死す

法名日理

光政

右大史 生國武蔵

享文十又年

右徳院殿を相たたく備つる

元和六年大津あつとむ

光直みつただ

寛永二年食禄まぐろくとすまひり
同十年より米比五百石と成す

伊右衛門 生國同家

後府よりひく 俗をかうし光直みつただ
の造次つぎとつぎ大内番とつぎ

寛永十年

將軍の食禄とす満り

同十一年大内番とつぎ

正重まさしげ

同十五年食色を大内番とす

基次郎 生國冬河ふゆがわ

右衛門殿

將軍家より侍人なり

寛永六年十二月死し四十三歳

正次まさつぎ

基次郎

生國武藏

將軍のつとむるゆゑの御食

うほり

家政

丸内まるのうち之の養やしやう

● 某

むす

足利太郎

生國氏

心條氏康よつふ

下総小葛乃味をせむの時先子と

むりく我功ありこれゆゑよ葛乃那

乃ら金町村曲金村小松川村

をひく五百貫の地をさづく本領は小
八百貫たり向後忠節とほくす
とひくはいよく褒みす
氏康書とあり
永禄十二年四月十七日四十歳
とく死と法名紹香

正家

主膳

生國同家

父が遠征つてきて氏志よつふ氏志
佐竹義重と上列友是とあり
とてかふ起小池沼小とひく銭を
合首級とゆふ

東照大権現園東入玉のともありて

はくす

又禄元年物解陣ありとあり、肥列

名護屋ありとあり、ひくあり

作をうりありとあり、山流を討陣

乃後葛西郡藤崎村一ノを記之
四百六十石ノ地ノ一ノ所ノ一ノ後
名法院殿下総ノ内大森村大戸ノ村
二ヶ所ノ一ノ一ノ所ノ一ノ所ノ一ノ所
石ノ地ノ一ノ寸
元和四年十二月十八日六十一歳ノ
名ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ

正次

清無清 生國同家

元和八年八月八日正家ノ遺次ノ

フ

名法院殿ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ

フ

將軍家ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ

ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ一ノ

清續

清右衛門

生玉同前

寛永三年六月

將軍家よりつとくはつり来り

中より

家紋

丸内のり立葵たかひ

本多

● 某

九友集

生國冬河

東照大権現より之よりくゆりて

志

九友集

生國同集

大権現

名徳院殿小つてくそゆり系

安永十七年八月軍七歳

去く死と 法名道全

忠重

九友忠

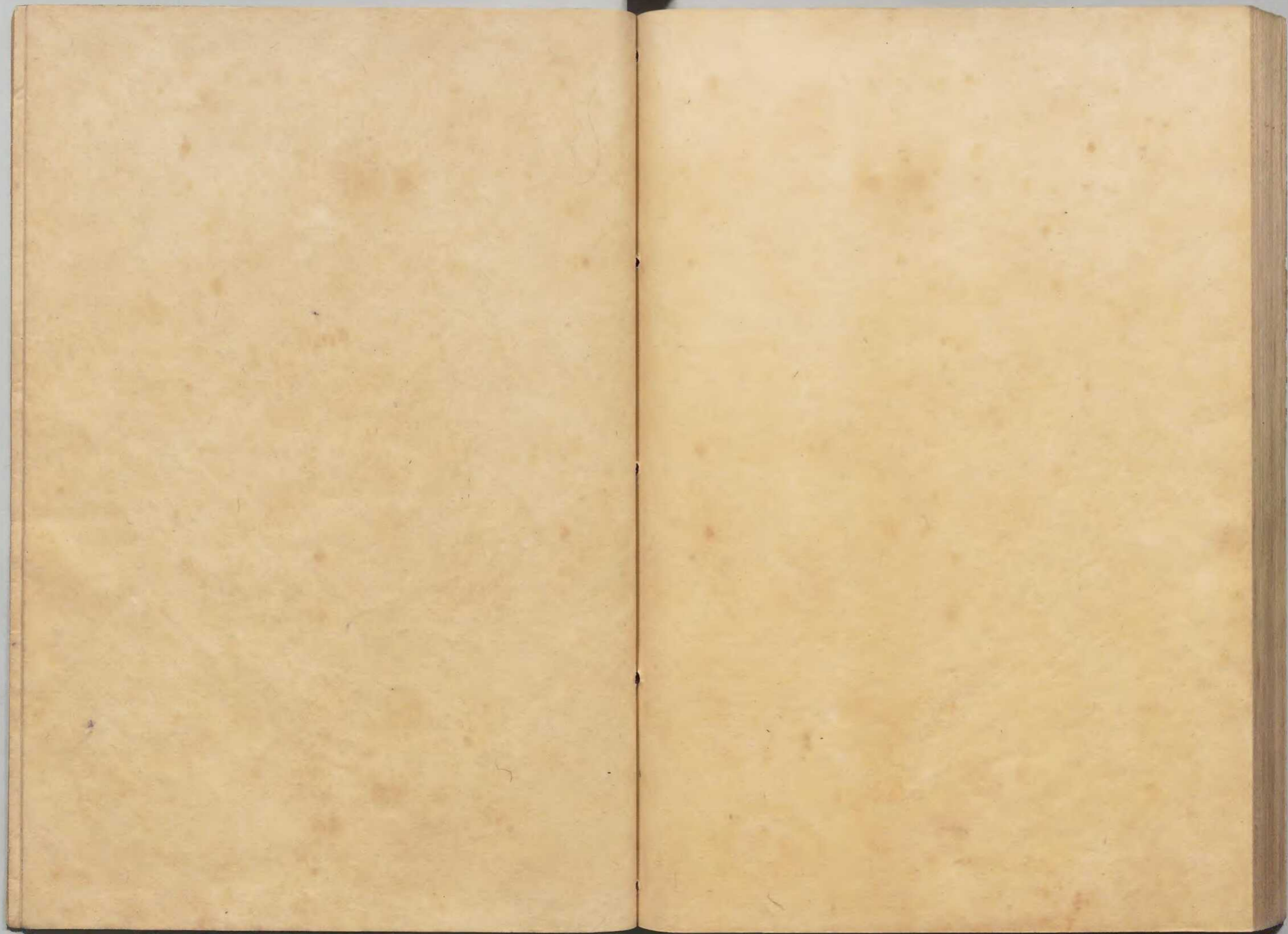
生玉武彦

名徳院殿

將軍家

家紋

五葵



本多

定勝

藤原

生國

東照大権現

名徳院殿

將軍家

字澄

甲印 出清

生玉 同前

大権現

右津院殿

右軍 殿

家紋

丸門

左塔

